



近代教学を「真宗同朋会運動」という信仰運動に伝承していった訓覇信雄師(1906～1998)

ります。  
1962(昭和37)年、宮谷宗務総長にかわって、訓覇信雄師が宗務総長となり、総長演説で「真宗同朋会運動」が提唱された。この中の「同朋会の発足について」という項目で、宗祖700回御遠忌を終えた後、1961(昭和36)年4月30日、法主(門首)の名で発せられた「御教書」の中から「人類根元の願いにこたえ、自らを失いつつある人間に、自覚の道を示す」というお言葉が引かれ

ています。それは「御教書」を通して発足することを意味するものであり、「現実の社会に、原理と方向とを与えることにより、世界にこたえる教団の形成」という「真宗同朋会運動」に対しての大きな願いがあったのです。  
次に「同朋会のうまれなければならぬ必然性について」述べられていきます。それは一言で言うなら「真の人間の発見」ということであります。その事を師は自身の著(死して生きる)に「現代人が人間を失っているという事実は、

やはりどうにもならぬ歴史の経過があるのです。結論をさきに言えば、近代人というのは、理知分別の奴隷になっている。(中略)そういうのが現実の状況でしょう。それは出口のない不安です。現代人が理知分別に立っている限り、出口は絶対にありません。(中略)中世のヨーロッパは、神の奴隷だった。それが近代に入って、人間は神を葬って、神から解放され、人間を中心とした世界を開いたのです。(中略)ところがそれは、中世の神の奴隷とはちがった新しい人間ではあつたけれども、実は真の人間でもなかつた。ところが、その新しい近代の人間を、真の人間だと思ひ込んだところに、今日の救うべからざる混乱の原因がある」と述べてある。つまり科学の

発達によって超越的な「神」を立てていく神話的表現では受け入れられなくなった。そこで理性に立つて生きる近代人こそ、解放され、独立した、人間性を回復した本當の人間であつたはずが、実は理知分別という自我意識を無条件に前提として立つていく構造をもつ近代の行き詰まりそのものの表れであるとしている。この近代の行き詰まりは西欧のエゴイズムの精神では打開する事はできなかった。真の人間の発見という人類の課題を荷い、使命を果たすべきは仏教であり、親鸞聖人の教法を聞思していくところの「真宗教団」確立のために、真宗同朋会運動は生まなければならない必然性であるとし、さらに「家」を単位とした門徒制から、個人の自覚(救済)の上に立った本来の宗教の展開が教団内部構造からの必然性として述べられてあつた。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」  
教区教化テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

# 教化本部通信 【第42回】

真宗門徒の生活 朝夕のおつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましよう  
を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましよう・報恩講を大切にお迎えましよう

本年1月より真宗同朋会運動の「興り」「歩み」「展望と方向性」についての検証を掲載しているが、本号は「興り」の3回目。宮谷法含師の「宗門白書」と訓覇信雄師の真宗同朋会運動提唱に至った願いについて触れている。  
また今回の「点描」は、1963(昭和38)年に訓覇信雄宗務総長を迎えて行われた「育成員研修会」について掲載する。

## 真宗同朋会運動50年に向けて

### その検証 興り(三)

### 弥陀の本願から興ってきた真宗同朋会運動

教化本部 古卿 誠幸

真宗同朋会運動は確かに宗門が興した運動ではありませんが、単一施策としてではなく、仏教・釈迦を生み出した、弥陀の本願から興ってきた同朋会運動であり、生まれなければならない必然性をもつたものであります。  
時の宗務総長宮谷法含師が出された「宗門各位に告ぐ(宗門白書)」(1956(昭和31)年)に「宗門が仏道を求める真剣さを失い、如来の教法を自他に明らかにする本務に、あまりにも怠慢であるからではないか。今日宗門はながい間の仏教的因習によって、その形態を保っているにすぎない現状である。」さらに師は「われわれ宗門人は、700年間、宗祖の遺徳の上に安逸をむさぼってきたのである」と深い懺悔をもつて宗門の実情を表明し、だからこそ、「再出発すべき関頭は、懺悔の基礎となる仏道を求めてやまぬ菩提心である」としている。さらに「混迷に沈む宗門現下の実情を打破し、生々澆漓たる真宗教団の形成を可能にするものは、この懺悔と求道の実践よりほかはない」と述べている。この懺悔と求道こそ弥陀の本願から発せられたものであ